

研究法・論文執筆プロジェクト活動報告(2014-2016年度)

代表 新崎隆子

メンバー 石黒弓美子、田村智子(3年間)、高橋絹子、渡部富江(2014、2015)、板谷初子
(2015、2016)、戸谷比呂美(2014)、西畑香里(2016)

活動報告者 石黒弓美子

プロジェクト発足の狙いと背景

このプロジェクトは研究方法や論文執筆に関する学びを通して、これまで問題意識はあるが論文作成にまで至らなかった人たちの研究を促し、通訳・翻訳研究のすそ野を広げることを狙いとして立ち上げた。当時は、理系の論文作成に関する倫理的な問題が浮上したことをきっかけに、多様な学術分野で研究の方法や手続きについての見直しが始まり、複数の学会が研究の質の向上を目指して学会員向けの論文指導を始めていた。

通訳・翻訳の分野では質の高い研究論文や発表は増えていたが、成果に至るまでの道筋について詳しく知るチャンスは限られていた。そこで、通訳・翻訳に関連する領域の専門家による、研究法についての講義と具体的な成果を上げるプロセスを学ぶ参加型のワークショップを企画した。

また、プロジェクトメンバーは研究法に関する専門書 2冊の輪読会を行い、そのうち Sandra, H. & Napier, J. (2013). *Research Methods in Interpreting: A Practical Resource*. Bloomsbury. の書評は『通訳翻訳研究』第16号に掲載された。

このプロジェクト活動報告では、3年間の間に開催した6回のワークショップについて、それぞれのメンバーが報告する。

第1回「研究を構想し執筆する」2014年11月22日(土)13:30—15:30 清泉女子大学

第2回「研究デザインと論文の構成」2015年3月1日(土)13:30—15:30 日米会話学院

講師 佐渡島紗織 (早稲田大学 国際学術院 教授)

ワークショップ報告 新崎隆子

初年度は早稲田大学の佐渡島教授に2回の連続ワークショップをお願いした。ワークショップは参加者との対話を通して行われた。参加者は数人ずつに分かれ、グループディスカッションを行い、その結果を発表して講評を受けるという形で進んでいった。

第1回は「研究とは何をするのか」という根本的な問いから始まった。参加者には経験を積んだ研究者や博士課程の学生もいたが、直ちに明瞭な答えを出すのは簡単ではなかった。その答えは二つの部分から成る。一つは「明らかにしたいことを見つけ、明らかにするための方法を探し、その方法を用いてそれを明らかにすること」。もう一つは「明らかにしたことを他者に伝えること」。つまり重要な発見をただけではだめで、きちんとした論文にして発表して初めて「研究をした」となるということだ。

次の問いは「研究論文とは何か」。いろいろな定義はあるだろうが、先生の答えは「先人からの知識を踏まえて、新しい知識を構築する営み」。すなわち、誰かが発見した内容をそのまま解説することは研究ではなく、また、新聞記事は内容が新しくても先人の知識をもとにしていないので研究ではないという。先生はこのような問いかけをしながら、研究の種類を「目的」「データ収集法」「分析法」「対象者の規模」の角度から解説をした後で、数点の通訳関連の論文の特徴を話し合うように指示された。その中には自分の書いた論文も含まれており、「こういう分類になるのか」と納得できて興味深かった。

一番盛り上がったのは「研究の問いとしてふさわしくないものはどれか」という15問のエクササイズだった。研究にふさわしい問いには「あいまいな概念や不特定の視点を含まない」「確認されていない前提を含まない」「検証が可能である」「疑似相関を問わない」の4つの条件があり、「一人暮らしの学生はご飯党かパン党か」は×、「人は何枚パンツを所有しているか」は○という正解を聞いて、あちこちから「当たった」「外れた」という声が上がった。

最後に、佐渡島先生は研究にふさわしい問いの5番目の条件として「誰かの役に立つこと」を加えられた。「研究は自己満足であってはならない。社会を良い方向に変えていくもの、誰かを幸せにするためのものでなければならない」と強調された。参加者の心に深くしみる言葉だった。

第2回目は、1回目の復習から始まったので、初めて参加する人が戸惑うことはなかったと思う。「研究目的と方法の関係に」について具体的な事例を使って解説された。参加者はそれぞれの事例について「量的研究方法」か「質的研究方法」か、「観察」か「インタビュー」を使うべきかについて意見交換をした。また、「観察」については「フィールドで直接観察する方法」と「映像にしたものを後で分析する方法」、「インタビュー」については「フォーマル・インタビュー」と「インフォーマル・インタビュー」について、事例ごとにどれが適切かを話し合った。

最後は研究をデザインする実習だった。グループは5つの条件に合う研究設問を掲げ、その答えを見つけるための方法を選んで、発表した。鋭い質問を受けて答えに窮する場面もあったが、中には実際に共同研究ができるのではないかと思われるような発表もあった。

佐渡島先生のワークショップでは「あなたは何のために何を明らかにしたいのか」という根本的な問いを突き付けられたような気がした。それと同時に研究の楽しさも味わうことができ、大変刺激に満ちた学びとなった。

第3回「通訳・翻訳の社会的意義とエスノグラフィー」

2015年11月8日(日)13:30-16:30 青山学院大学

講師 猿橋順子（青山学院大学 教授）

研究事例発表 板谷初子（北海道武蔵女子短期大学）

齊藤奈穂（都立特別支援学校主幹教諭）

ワークショップ報告 板谷初子

ワークショップ・プログラム概要

1. 講演「通訳・翻訳の社会的意義とエスノグラフィー」
2. 研究事例報告
3. ディスカッション

ワークショップの目的

1. 通訳と翻訳という異言語話者の橋渡しをする現場において、エスノグラフィーを援用する意義と可能性を検討する。
2. エスノグラフィー法を援用した2つの研究事例を通して、この研究法の将来的展望を参加者が共に考える。

講演「通訳・翻訳の社会的意義とエスノグラフィー」概要（猿橋順子）

1. エスノグラフィーにおいて、いかに通訳・翻訳を活用するかが従来のエスノグラフィー研究と通訳・翻訳研究の接点だった。昨今、通訳者の介在する場面をエスノグラフィックに研究する学術的・社会的意義が広く認められつつある。
2. エスノグラフィーの特徴
 - ① 一般的に共有されている言説やモデルストーリーとは異なる、別の見方、「内側の論理」「ローカルな知」にアクセスする。
 - ② 場の力動、関係性、相互作用など「動き」のある現象にアクセスする。
 - ③ 記述、言語化されていない規範や様式、論理を記述・言語化する。
3. 一般的な質的アプローチの流れ エスノグラフィー法の流れ



4. 調査・分析時の留意点

- ① データ整理は実地調査後、すぐに行う。録音した場合は調査協力者の語りだけでなく、自分の問いかけ方にも注目する。
- ② 気づいた点はメモ書き（文章化だけでなく図式化も試みるとよい）をこまめに行う。

③文献調査はフィールドに入る直前までみっちり。一旦フィールドに入ったら脇に置く。

④守秘義務など倫理事項を確認する。可能な範囲でメンバーチェックも取り入れる。

5. 論文執筆

①主題が決まってから全体を再構成する。

②感情的、修辭的表現を避ける。

6. 学会誌への投稿

①バックナンバーに学ぶ。

②投稿論文の字数は、修正を見越し、実際の制限の70%程度に抑えられていると良い。

③査読のコメントを最大限生かす(鵜呑みにするのではなく・・・)。

研究事例報告 1. 「プロ野球通訳者の役割」(板谷初子)

プロ野球通訳者が果たす役割と、スポーツ通訳者に求められる資質を明らかにすることを目的として、プロ野球球団におけるフィールドワークの事例が報告された。参加者からは、「観察者の存在自体が研究協力者の行動に影響を及ぼすのではないか」という質問がなされた。それに対して猿橋順子先生から「研究者の存在及び研究協力者への還元も含めてフィールドである」というコメントを頂いた。

研究事例報告 2. 「特別支援学校の多言語情報発信」(齊藤奈穂)

発表者は、自身が勤務する特別支援学校が発信していた「学校教育・教育相談情報」が外国人には伝わっていなかったことを認識する。そのため、自分の職場をフィールドとして、発信の仕方を改善するため、現状把握から、計画立案、改善までのプロセスを研究対象とした。事例報告1とは対照的に、実践現場の「内」に研究者がいることによる難しさが報告された。また、自らの提案が学校経営管理者である校長、副校長の判断によっては実施される保証がないため、研究が続けられない可能性が示唆された。

結び

本ワークショップは、日本通訳翻訳学会と日本言語政策学会との共同開催で行われた。参加者数は28名で、公務員など大学関係者以外の方も数名ご参加くださり、幅広い視点からエスノグラフィー研究に関する活発な意見交換がなされた。

第4回「談話分析の手法と比較言語文化研究の意義」

2016年1月24日(日)13:30-16:30 上智大学

講師 藤井洋子(日本女子大学 教授)

研究事例発表 田村智子(早稲田大学)

ワークショップ報告 田村 智子

ワークショップ・プログラム概要

新崎隆子総合司会による本ワークショップの趣旨説明後、藤井先生による談話分析の手法を用いた比較言語文化研究について、これまでの様々な研究事例を用いながらの講演をいただいた。続いて田村智子会員による研究事例発表後、講評・質疑応答、総合討論を行った。

「談話分析の手法と比較言語文化研究の意義」講演内容

1. 談話分析とは

談話分析 (Discourse Analysis) とは、1970年、80年代より使われ始めた分析の方法論で、言語学・人類言語学・哲学を発端とし、その手法は「コミュニケーション研究」「認知心理学」「社会心理学」「人工知能」「批判的談話分析」等、多岐にわたる専門分野に応用されている。ここでいう「談話 (Discourse)」とは、「一文」を超えた単位 (“beyond the sentence”) であり、分析の対象は、1) anything beyond the sentence、2) language use、そして特に CDA (Critical Discourse Analysis) では、3) a broader range of social practice that includes nonlinguistic and nonspecific instances of language が対象となる。これまでの重要研究例として、“Pear Story” (1975年にカリフォルニア大学バークレイ校の Wallace Chafe によって考案された6分間の film で、視聴後における映像内容の言葉での描写に関して、異なる言語、認知、文化間での比較研究)、“Frog Story” (1980年代に同じくカリフォルニア大学バークレイ校の Dan Slobin によって作成された24枚の絵本で、これにより子供の言語習得における異言語間の比較が可能) 等がある。また代表的なコーパスとして The Santa Barbara Corpus of Spoken American English、文字化 (Transcription) の代表的な方式として、Santa Barbara 方式などがある。

2. 談話分析例

① 「徹子の部屋」: 日本語の語順の逆転現象について

「語順」は通訳における重要なテーマの1つだが、「日本語における語順の逆転現象」について大変興味深い研究事例の解説があった。語順の逆転現象とは以下のような発話である。

●「読んだ、昨日の新聞」●「考えていますか、これからのこと」●「いつまで我慢するの、その痛み」●「バカね、私って」●「本当なの、それは」●「ありますよ、そういうこと」。

同様の発話現象がテレビ朝日の人気番組「徹子の部屋」におけるインタビューでも数多く観察される。データ分析によると、多くは以下括弧内のような「語用論的有用性」が要因であった。

●「ひとまわり上なの、お父様が」(質問) ●「怪我をしたっていうのは何だったんですか」(立ち回りでズバツと切られたんですよ、顔を) (答え) ●「父親とか母親の話ってのは、親が直接しないんですよね」「そうそうそう」「子供も聞かないんですよね、なぜかそういうこと」(焦点) ●「すごい精神力の強い人なんですよ、あの人は」(内容の高め) ●「立って、つまずいたら、缶からに」(時間的關係)。

以上の例のような「語用論的有用性」以外の要因による逆転現象としては、●「小皿を作ったんですよ、5つぐらいかな」(発話計画の失敗) ●「鉛筆で書いてますでしょ、小学生の頃」(発話計画の失敗) ●「口から出まかせなんです、あれ」(強調) などがあり、要因の比率は、1) 語用

論的有用性(72.6%)、2) 発話計画の失敗(15.7%)、3) 強調、その他(11.7%)となった。

②「太郎と花子のブラインドデート」: 日本語話者の主語選択要因 & 言語間における差異

言語による「主語選択」の差異も通訳における大きな関心事である。この研究では、連続したストーリーを構成する 12 枚の絵を見てストーリーを構築する際に、日本語話者は誰をどのように選択して主語にするかを、1) あらかじめ与えられた視点 (global theme)、2) 出来事を中心となるテーマ (local theme)、3) 語りの連続の中での直前のテーマ (previous theme)、の 3 つに分類したところ、2) local theme が最も大きな要因であることが分かった。また、先行研究との比較で、この日本語話者における主語選択方略が韓国語話者及び英語話者による主語選択方略と同じであることも判明し、主語の選択における言語間の共通性を示唆した。

③「課題達成における相互行為」における母語の「文化・社会的背景」との関連

「日英」等の異言語間を行き来する通訳では、会議等での発話の種類や形態に常に文化的差異を感じる。この研究では、日本人、韓国人、アメリカ人各言語グループでそれぞれ 10 組程度のペアが同一の課題達成作業をし、交わされる発話の特徴、例えば、ターン数、ターンの長さ、アイデアの提案と意見の提示(陳述文、緩和表現を伴う陳述文、陳述疑問文、疑問文)等を観察。アメリカ人ペアの特徴は、1) 相手の発話の繰り返しや同じ文言の同時発話のような言語的共同構築は低頻度、2) 個人のアイデア・意見が表出、3) 頻繁に相手の意見を引き出さない、4) 意思表示は自発的、なければ賛同と解釈、5) 発話は「長め」で話者交替も低頻度、ゆえに個人独立型、「個対個の対峙的」特徴がみられた。対して日本人ペアは、1) 物語内容の共同構築のみならず、作業過程で相手発話の繰り返しや同じ文言の同時発話の多用など高頻度の言語的共同構築、2) 高頻度での相手の合意・賛同確認、短い発話・頻繁な話者交替による自他融合的な相互行為、という特徴が観察された。

研究事例発表 「警察の事情聴取における通訳の正確性・中立性の間接的判断の可能性」(田村智子)

ELAN を用いて「質問と答えの噛み合い」「原発話と訳出文の長さの差」「通訳人と被疑者間の追加やり取りの多寡」等の談話分析を行った結果を発表した。

第 5 回「質問紙法への誘い」

2016 年 10 月 23 日 13:00-17:00 東京外国語大学本郷サテライト

講師 原和也(明海大学外国語学部英米語学科 准教授)

ワークショップ報告 西畑香里

質問紙法の特徴

質問紙法とは、調査対象者に紙面上の質問項目に回答してもらい、その回答をもとに人の内面的そして外面的な側面を理解していこうというものである。利点としては、考え方や価値

観、パーソナリティ等、個人の内面を幅広く捉えることができ、短時間で大人数に実施可能であるだけでなく、費用も比較的安くおさえることができ、研究参加者も自分のペースで回答できることが挙げられる。一方で、個人の内面を深く捉える難しさ、研究参加者が自分の望ましい回答をしてしまう可能性等の短所がある。

質問紙の作成

質問紙の作成にあたり、まず構成として、タイトル、調査概要、依頼文と謝辞、記入上の注意、質問本体がある。タイトル設定は、この調査結果を知りたいと研究参加者に思わせるような魅力的なものであると協力を得やすくなると言える。

次に質問の立て方について考慮すべき点として、統計処理を行うか否か、どのような質問形式を選択するかがある。研究参加者自身の言葉そのものに関心がある場合や、予測できない答えも期待する時は、自由回答形式を選び、統計処理を行うことを想定して仮説を検証する場合は選択肢方式を用いる。自由回答形式では、選択肢方式よりも詳細な情報や予期せぬ知見が得られるという特徴がある。一方の選択肢方式では、「多岐選択式」「正誤式」、複数回答も可とする「チェックリスト」「評定尺度法」があり、どれか一つを選ぶ多岐選択式でも、網羅的な選択肢を作ることが難しい場合は、「その他」等自由回答を含んだ回答のカテゴリーを用いることがある。

質問項目の設定

具体的に質問項目を作成する際の注意点の事例としては、曖昧な表現を使わない、難しい用語を使わない、ダブルバーレル質問（一つの質問項目に複数の内容が含まれていて研究参加者が混乱してしまう）をしない、誘導的な表現を使わない等が挙げられる。また、バックトランスレーションによる質問の等価性の問題の検討や、文化によってはワーディングを微妙に調整する必要性もある。

質問の配置、実施にあたっての留意点

質問の配置は、研究参加者が答えやすく協力的になるよう気軽に答えられる質問から始め、内容が関連している質問をまとめて配置し、思考の流れを中断するような配置をしない、回答選択肢の順序にも注意することが必要である。実施時間は長くても30分以内が一般的であり、A3用紙や両面印刷よりもA4で片面の方が心理的負担は比較的軽くなる。

質問紙作成・実施の流れの事例

1) 目的の明確化・対象者選定、仮説設定、2) 質問項目作成、3) 予備調査（30－100人程度）と結果分析、4) 質問項目修正と編集、5) 質問紙調査の実施（原則的には回答者は多ければ多いほど良い）、6) 集計と分析、仮説検証

科学的研究における測定の役割、各用語

測定 (measurement): 可視化できない概念を一定の規則に基づき数字に置換えて捉える。

尺度 (scale): 数値を与えるルール

変数 (variable): 概念を数字で表したもの

妥当性 (validity): 測定すべき概念がどの程度正確に測られているか。

信頼性 (reliability): 同一の概念について同じ結果が得られる程度。複数の項目を用いて測定するのは、測定される概念が一つの項目だけで測り得るものではなく、研究参加者側で項目の誤解などの可能性があり、必ずしも理解が安定しているとは限らないためであり、一つの因子(潜在変数)に最低 4 項目、出来れば 5-7 項目あると良い。

統計学的検定(仮説検定)

目的: 集団の規則性理解のためにデータを単純化する。

統計の種類: 記述統計—平均値や得点の広がりを示す分散などデータの特徴をまとめる。

推測統計—全体(母集団)から一部(標本)を取り出し全体について推定する。

手法: パラメトリック法(t検定、相関分析、分散分析)—母集団の特性を規定する母数について仮説をもうけるもので、母集団の分布が正規であることが前提、サンプルサイズは原則的に多いほど良い。(例: 各群 30 程度。20 項目程度の尺度であれば 120 以上必要。)

ノンパラメトリック法(カイ二乗検定)—集団パラメータの推定を行わず、母集団の正規分布は前提としていないため、30 程度のサンプルで実施可能である。

結び

より正確に、効果的に、研究参加者の本音を引き出すための質問紙法の特徴や、作成にあたっての注意点等を、演習を交え講義頂いた。質問紙法は身近なものであり、質問紙作成・実施の機会、もしくは自分自身が研究参加者になる機会も多くあると思われるものの、注意すべき点は多岐にわたり、作成にあたっては、内容を吟味し、推敲を重ね、さらに予備調査を通じて改善点を指摘してもらうなど、自己の質問紙を常に客観視し、入念な準備を重ねてから実施することが望ましい。参考文献もご紹介いただき、具体例や演習を交えた分かりやすいご講義は非常に有意義であった。

第 6 回「インタビュー法」 2017 年 1 月 14 日 13:00-17:00 清泉女子大学

講師 藤田ラウンド幸世 (立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科 特任准教授)

ワークショップ報告 石黒弓美子

研究と研究者としてのポジショニング(立ち位置)

藤田ラウンド先生の講義は、どのような研究にも重要な、研究者の立ち位置に関する話から始まった。研究とは、1) 人間が現象を理解するために用いる方法のひとつであり、2) データの収集、分析、解釈を通して行う系統的な探究のプロセスである。また、3) その目的は、現象

の理解、記述、予測、統制、または研究対象となる人々の社会的地位向上など様々なものがある。すなわち、研究とは「科学的営為であると同時に社会的営為ともなる」ものである。

研究法、すなわち「データ収集・分析のための具体的な手続き、戦略、テクニック」は、研究者の持つ存在論、認識論、方法論的問いによって規定される。

存在論（Ontology）には、研究対象を「客観的実相として存在するととらえる実在論」を取るか、「純然たる客観的実相は存在しないと考える反実在論」をとるかの二つがある。

また、認識論（Epistemology）には、「私の認識活動とは独立に現実が存在するとする客観主義（Objectivism）」と、「『現実』は私自身と、見ている事象との相互作用の中で構築されるとする主観主義（Subjectivism）」とがある。

さらに、方法論とは「どのように世界は研究されるべきか」という哲学的な問いである。存在論的には実在論に立ちながら、認識論では客観主義に立つのが「論理実証主義（本質主義）」であり、存在論的には、同様に実在論に立ちながら、認識論では主観主義に立つのが「構築主義・社会構築主義」である。

以上の視点からの研究者の立ち位置（ポジショニング）が、インタビュー法の実施に際しても重要であり、なぜインタビュー法を選ぶのか、インタビュー法が、自分の研究設問への解を見いだす上で最適かどうかの判断が重要である。

インタビュー法とは

インタビュー法は、質的研究法の一つである。「量的研究の限界を出発点」として行われるという理解を基に、研究のデータを取得するために活用されるが、既存の説の立証を試みる「論理実証主義」的アプローチではなく、「データとは、（研究者によって）再構成された部分的現実である」という「構築主義」のアプローチを取る。

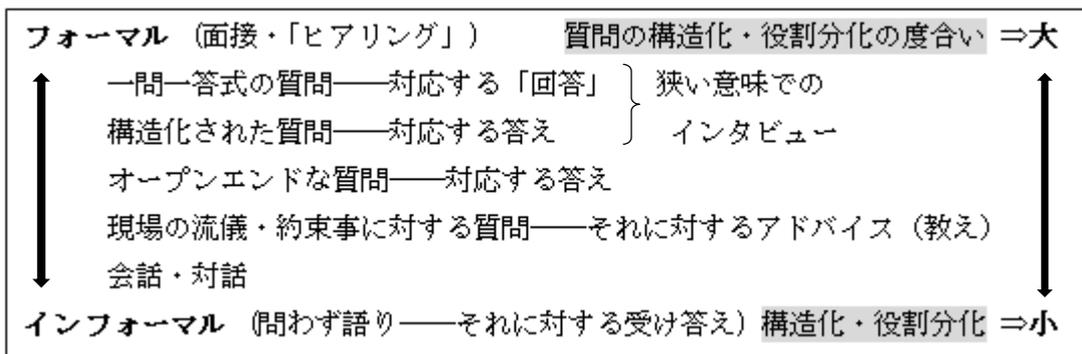
インタビューの方法：フォーマル・構造化 vs. インフォーマル・非構造化インタビュー

インタビューの方法には、1) フォーマル/構造化インタビューと、2) インフォーマル/非構造化インタビューとがある。1) は、あらかじめ系統的に整理された質問項目を準備し（構造を作っておき）、聞き手は話し手と向かい合って座り、大体は準備したプラン通りに質問を行っていく。この方法では、予め聞きだす項目が決まっているので、新しい発見はあまり期待できない。一方、2) の方法は、アンケート調査の初期や中期の段階で行われる事が多く、必ずしも1対1のフォーマルなセッティングではなく、自由に質問をする。頓珍漢な、あるいは見当違いだと思われる質問が出ることもあるが、それゆえに大きな発見につながり、次第に焦点がつかめる可能性もある。相手との関係構築が生まれる可能性もある点が利点でもある。

実際のインタビューでは、場面によって、1) と2) を使い分けたり、組み合わせたりする。ここでは、最初に準備した一定の質問項目でインタビューを始め、場面に応じて質問をつけ加えたり、発話を促したりすることが可能であり、これを半構造化インタビューという。

インタビューの構造化度・聞き手とインタビューの役割分化の度合い

フォーマルからインフォーマルまで、以下のように構造・役割分化の度合いが異なる。



佐藤郁哉 (2006)『フィールドワーク増訂版』新曜社 p.196 図 iii・4

フォーマル・インタビューにおける一連の作業

以下に示すプロセス全体を「インタビュー」ととらえる。

- ・ 事前の下調べ
- ・ 質問項目の確定
- ・ アポイントメントの取り付け
- ・ インタビュー実施
- ・ インタビュー記録の作成 (聞き取りノート、テープ起こし記録)
- ・ インタビュー記録の分析

佐藤 (2002)『フィールドワークの技法』p.249 図 5・2 から

結び

インタビュー法で重要なことは、1) 研究者としてのポジショニング、2) 構築主義の解釈的アプローチ、すなわち「データとは再構成された部分的現実である」との理解、3) 研究のデザイン、自分が研究したい対象者とその対象者から得られるだろうデータを「どのように」インタビューで導きだすか、4) 半構造化インタビューの活用、及び、5) 構造を(研究対象者と)一緒に構築するプロセスであるとの認識である。

当初の質問項目の特定すらも容易ではない。予想外の現象が観えてくる可能性もあり、創造力と感受性と柔軟性としっかりとした観察眼が求められると言える。一度で解が出ると考えず、試行錯誤を重ねる中で忍耐強く研究対象と向き合うことが不可欠であろう。

以上、いずれのワークショップも 20 数名から 30 名前後の参加を得て盛況であった。研究方法については、指導を受ける機会が少なく、今更誰にも聞けない、誰に聞いたらよいのかわからなかったという声もあった。近年は、量的研究と質的研究双方の利点を活かした混合研究方法も注目を集め、いかに知の探究を深めるべきかの研究法の研究も進んでいる。諸研究法の専門家から、研究とは何かの哲学的指針から研究法の具体的指導までを受けることができたこの 3 年間の研究法・論文執筆プロジェクトは、参加者にとって学びの多いものであった。